

A sepia-toned aerial photograph of a traditional East Asian village. The scene is dominated by numerous buildings with dark, tiled roofs, arranged in a dense, organized pattern. In the upper right quadrant, a prominent multi-tiered pagoda stands out against the sky. The background shows rolling hills and fields, suggesting a rural setting. The overall atmosphere is historical and serene.

朝鮮平定後の新羅と日本

家安建次

青山ライフ出版

目次

序	6
葛城襲津彦の新羅遠征	8
新羅記	31
葛城の一言主	49
新羅を日本は高麗より救済する	64
高麗より救済した新羅を攻略	69
百済が高麗に滅ぼされる	77
雄略天皇の死	82
傭兵蝦夷人の反乱	86
武烈天皇の狂乱	90

朝鮮平定後の新羅と日本

・葛城襲津彦の新羅遠征

・新羅記

・葛城の一言主

・新羅を日本は高麗より救済する

・高麗より救済した新羅を攻略

・高麗、百済をほろぼす

・雄略天皇の死と反乱

・傭兵蝦夷人の反乱

・武烈天皇の狂乱

・任那四県の百済への割譲

・磐井の乱

・近江の毛野臣の派遣と死

・百済の聖明王の任那の再建会議

・任那復興の混迷

- ・ 任那日本府の不正
- ・ 高麗の大乱と百濟
- ・ 王子・余昌と聖明王の死
- ・ 任那を助ける日本の將軍達の恥
- ・ 推古天皇の新羅征討の再開

序

その昔は日本の島根の国と新羅とは天皇の始祖・スサノオノ命が築き上げた同じ国であった。便宜上、新羅と述べているが新羅と改名したのは503年で、この時代の正式名は斯蘆（斯羅）と言った。斯蘆（斯羅）とは土器を使う農耕の国から分かれた国、網を使う海洋国から分かれた国の意味でもある。新羅はその昔、日本、島根の国から分かれた国である。

その新羅から分かれて再び日本の国と成ったのが任那である。初めて天皇の位に即いた崇神天皇が即位した時、わが国の出身者が日本の王に成ったと新羅の一部、任那が日本に帰属して来たのだ。

崇神天皇は別名・ミマキ天皇と言う。任那（ミマナ）とは崇神天皇・ミマキ（任）の国（那）と言う意味である。

又、任那とは王（任）の国（那）と言う意味でもある。

これは即ち天皇の始祖・神武天皇が任那出身だと言う事でもある。

又、新羅の羅とは任那の那と同じ「国」の意味でもある。

本来はミマキ（任）の国（羅）、任羅と言うべきであるが新羅との対抗上、任那と名づけた。

「朝鮮平定後の新羅と日本」はこの任那が滅亡する歴史でもある。

日本の任那と、昔、同じ国であった新羅は日本武尊の東日本平定に感動し、朝鮮平定を願って神功皇后の朝鮮遠征に成ったのだ。

だからこそ元新羅の任那出身の人が日本の王に成っていたとしても、新羅には日本による朝鮮の支配は不本意であった。

特に神話には……新羅国を馬飼いとさせた……と屈辱的な表現が記されている。それは後に新羅が日本に反逆して朝鮮を奪た事への憎しみの意味もあるが、朝鮮の学者は神話のそう言う屈辱的な記述は認めていない。高句麗の好太王の碑文の中に、神功皇后の朝鮮遠征が書いてあっても認めていない。

新羅の民は新羅の王族・神功皇后が腹中の日本武尊の孫もって朝鮮の王にしようとした。だが、その孫が日本の天皇・応神天皇になってしまった。しかも新羅は人質を取られ年貢も払う、日本の支配は全く不本意であった。だから新羅は地中に深く根を張った雑草の如くに取っても取ってもはびこり反抗し確執は続いた。その確執の最たるモノが葛城襲津彦の新羅遠征であった。

葛城襲津彦の新羅遠征

葛城襲津彦は世紀のスーパースター武内宿禰の子であり、襲津彦の娘は天皇の妃となっており、後の世の天皇を生んでいる。

葛城とはヤマトでは事代主王の代名詞であるから、武内宿禰の子のうちでも特別に身分の高い存在であったと思われる。

そんな素晴らしい身分の最高権力者である將軍が新羅に派遣されるや、日本の任那国を討つと言う、とんでもない反逆行為をしてしまうのだ。

反逆行為なんてモノではない。日本の朝鮮経営を根底から揺さぶり破壊するものであった。

襲津彦とは前の物語・神功皇后で新羅にダメされて新羅の王子を逃がし、新羅の使者三人を檻の中に入れ焼き殺した襲津彦である。

襲津彦が新羅の港に着くや新羅はドラを鳴らして襲津彦をあたかも凱旋將軍の如く盛大に歓迎した。新羅は従来の方針を百八十度転換して日本の朝鮮支配を歓迎し、襲津彦を大歓迎して迎入れた。

何故なら新羅は日本に反抗すればするほど、あがけばあがくほど、新羅の済州島等を奪われるなど日本に首を絞め上げられるからだ。

その新羅の歓迎ぶりは大変なモノであつた。今までに命を賭けた、命を削る激務を日本の為に尽して来たが、これ程の歓迎は襲津彦には日本では未だ過つて経験した事の無い事であつた。

毎夜の大歓迎の中で襲津彦は透きとおる程の美しい肌に咲く、つぶらな瞳に赤い唇、心が震えずにはいられないほどの、いや、このまま死んでしまつても良いほどの美しい女性を見つけ茫然自失した。

襲津彦は新羅の王に彼女を所望したいと言つた。王は、彼女はその様な女性ではないと顔を曇らせた。

襲津彦は何としても彼女を欲しいと王に要望すると王は、弱つたな、いや、私の顔に変えても何とかしましょう、と言つた。

次の日に襲津彦は王から言われた。「彼女に話したら、彼女は『それは死んでも嫌だ、断ると』言つた。『これは王の命令だ』と言つと、彼女は『襲津彦様が一生涯、私を愛する』と言うならば会つても良い」との返事です。

襲津彦は死んでも会いたいのだ。すぐにそれを承諾した。

襲津彦は小さな家に案内された。ここは敵国新羅である。どの様な暗殺の刺客や細工が有つて

も良いはずだ。が、襲津彦は無防備に一人で入って行った。

襲津彦が部屋に入って行くと彼女が一人で居た。彼女は昨日逢った時以上に美しく見えた。しかし横には短刀が置いてあった。

「この短刀で俺を殺すつもりか」と問うと彼女は「遊びで犯すと言うならこの短刀で死ぬ。しかし今までの如何なる女よりもあなたの妻よりも愛が大きく深いモノならば私の体を奪つても良い。しかしそうでなければ、私は死に、裏切つたらあなたも殺すであろう」と言った。

襲津彦は「あなたは私の妻以上に愛してる。一生涯愛して離さない」と言う、敵がいに満ちた目は憂いに満ちた女に変わった。

この世とは思われない美しい人が愛を受け入れたのだ。

夢の様な不思議な陶酔が襲津彦の体全体を包んだ。

風がサーと吹き込んでくると花の香りと彼女のなまめかしい女の香りが合わさり、あたりに匂い満ちて襲津彦はたまらなくなつて彼女を抱いた。今まで多くの女を抱いて来たが、身をのけぞらし痛い痛い泣きむせび、そして嗚咽のうめき声を上げて喜ぶ様は正に男を知らない無垢の生娘であつた。こんなに美しい女が無垢なみずみずしい生娘であつたかと思ひに思つたが、分かつた時にはしびれる様な快感が襲つた。絶世の美人の生娘を征服した喜びは単に陶酔にとどまらず、その時の心の満足と感動は襲津彦の人生観が変わつた。この年になつても、こんな情熱が自分